

来ておりました。寮生全員の自己紹介があった後、山崎さんとの質疑応答にはいったが、新年度カレッジへ進みたい希望者は真剣に自分の要望を訴えていました。このような場に同席すると、奨学生にさせて欲しい意欲が、じかに強く伝わってきます。フィリピン滞在最後の日、モロココミュニティのナプサさんから、助産婦を目指す奨学生のための、援助の要請があり、その場にも同席し、同じ思いを強く感じました。これだけでも、来た甲斐があったと、強く感じる。

翌朝5時頃から、寮生全員による外の掃除がはじまりました。広い屋敷の中には、事務所、私達が泊まっているスタッフハウス、ノビエート新旧寮、礼拝堂等があり 聞くと毎日掃除をしているとの事。

(2) 屋根と柱だけで壁の無い礼拝堂で、10時からクリスマスパーティが始まりました。寮生達は民族衣装を着て、それぞれ出身地ごとに、歌や踊りを披露し、父母の踊りや歌やゲームもあり、楽しい一時が過ぎました。やがてプレゼント交換、そして山崎さんから奨学生一人一人に、お年玉が手渡され、寮生達は大喜びの様子です。パーティ開始前、民族衣装の寮生達と写真を撮る事になり、私が端に立つと、寮生達がワッと寄って来て、手を握り、肩を抱き、もみくちゃに成りながらカメラに収まりました。しらけ切っている日本の子供達に比べ、何と素直で純真なのだろうか、心を打たれ、人間の本当の姿に接した一瞬でした。

(3) クリスマスパーティ終了後、午後1時に、払い下げの軍用トラックで ミアソンへ向けて出発しました。神父さんが、私に助手席に乗るよう進めてくれましたが、希望して荷台に乗せてもらいました。荷台には神父さん、寮生男女10名、アトゥモロックの先生3名、最後に 1歳の赤ちゃんを連れてミアソン寮の寮母さんも、上がってきたので、助手席の1人分の空き席に乗ってもらいました。私が荷台に乗らなかつたら、この親子は荷台の上で、デコボコ道を激しく揺られながら、3時間近くもかかる、ミアソン迄行くつもりだったのかと、そのたくましさ、強さに敬服した。どんな 悪条件下でも 生き抜ける 力強い生活力と生命力を感じました。

舗装道路を40分も走ったら、デコボコの砂利道に変わり、2時間40~50分でやっとミアソンへ到着。その間、言葉は通じないが、身振り手振りで話は分かり、運転席の屋根にも乗った寮生と、先生達と、和気あいあいでした。

(4) ミアソン寮はその夜 発電機が無く真っ暗闇である。ケロシンランプ(日本のランプのほやを取って机の上に置いた明かり取り)2台で、寮生が作ってくれた料理を、神父さんを交えていただく。寮生は上手に素手で食べておりました。食後 本来は宿題をすところを、特別に30分間の許可が下りて、山崎さん、寮母さん、寮生10名(奨学生のみ、他の9名は帰宅している)と、私の13名で懇談の時を持つ事ができた。

山崎さんから各自のサポーターの説明があり、皆 熱心に真剣に聞いていました。又、カレッジへの進学希望も語られ、終わって見れば30分オーバーの1時間が過ぎていた。直接寮生に接する事ができ、各自の勉強に対する情熱と希望が 手に取る様に分かり、支援の必要性和重要性が理解でき、訪問の目的の一つである事を強く意識しました。

(5) アトゥモロックへの往路は寮生男子1名、女子2名と、神父さん。途中まで行くと、馬に乗った3名の小学生が迎えに来てくれました。丁度その時は、トラックが立ち往生してしまい、ウインチのワイヤーを太い立木に縛り付ける作業を、3回も繰り返す状況にあった。小柄な小学生ですが、敏捷に手伝う姿は、大人顔負けの動きです。

ひ弱な日本の子供とは、比べものにならない、雲泥の差を感じました。急な坂をやっと登り切り、トラックは自走し始めた。馬にまたがり さっそうと後ろから付いて来る姿は頼もしく、私が拍手をすると、小学生は得意満面。

(6) 翌日7時頃から、小学校の朝礼に出席し、全生徒に鉛筆、ボールペンのプレゼント。先生から一人一人に